

## 肺検診の重要性について — 肺癌 —

国立病院機構和歌山病院

院長 南方良章

本シリーズの第1回でお話をしましたが、2020年には肺癌、COPD（慢性閉塞性肺疾患）、肺炎を含む呼吸器疾患が、死亡原因の多くを占めると予想されています。定期的な肺検診にて病気を早く見つけて、早く治療することが必要となります。本シリーズは肺検診の重要性を結核、肺癌、COPDの3つの病気をとおしてお話します。

2回目は肺癌のお話をします。グラフは臓器別の癌の死亡率です。縦軸が死亡者数、横軸が年度です。癌の中でどの種類が増えているかを見ますと肺癌が、圧倒的に増えています。これからの肺癌は、ますます増え続けます。肺癌の死亡率は男性では第1位、女性は2

位であり、男女合わせると第1位です。胃癌がいますが、胃癌を抜いて肺癌がトップになりました。この理由は、胃癌では胃カメラで健康診断することができ、早期発見で治る確率が上がったのです。肺癌の場合はあまり症状が無いので検診に行かなくては見つからない、あるいは胸部X線写真で見つけにくい肺癌があるという問題があります。ここで、和歌山県を見てみますと2013年の年齢で調整した肺癌死亡率は、全国ワースト2位です。特に男性の肺癌死亡率が極めて高く、検診受診率も全国平均を大きく下回っています。全国の肺癌の死亡率が増加

傾向で推移していくなかで、全国とくらべても和歌山県は、さらに死亡率が高くなっているのが現状です。

肺癌の原因は大部分がタバコです。肺はスポンジのような構造をしていますので、タバコを吸うとニコチンやタールがついて非常に汚くなりま

す。その他では大気汚染、アスベスト、遺伝的な要素もあります。最近まで、和歌山県の喫煙率が全国でかなり高い位置にありました。現在は低下してきており将来的には肺癌は、減ってくる可能性があります。現状では、まだまだ増えることが予想されます。喫煙の危険度を評価するものに喫煙指数（プリンクマン指数）があります。これは一日の喫煙本数×喫煙年数で評価します。例えば、一日20本吸う方が20年間喫煙すると400（20×20＝400）と計算します。一般的には400を超えると癌の危険性が高くなると言われています。もう一つは、何歳くらいから吸ったかが重要となります。19歳以下、20～24歳、25歳以上では、吸い始める年齢が若いほど肺癌の死亡率が高くなります。学校教育の中で禁煙教育をしているところもあるようです。また、ある患者さんは、わたしは20年前にタバコを止めたので問題ないと思っ

ている方がおられました。確かに喫煙して年数が経てば経つほど癌にかかる確率は下がると言えますが、タバコを吸う前の肺にはもと

